

仮想的質問による消費理論の検証*

ーライフサイクル・恒常所得仮説を中心とした日米比較分析ー

窪田康平†

2009年4月23日

要旨

本論文の目的は、恒常所得仮説を検証するためのユニークな仮想的質問が含まれているアンケート調査を用いて、ライフサイクル・恒常所得仮説(LCPIH)を中心とした消費理論を検証することである。分析の結果、標準的なLCPIHを支持する家計は少数だが、LCPIHに基づく消費理論を含む広義のLCPIHを支持する家計は大多数であることを確認した。したがって、多くの家計がLCPIHの枠組みに基づいて行動している。また、恒常所得の変化に対して、消費を非対称に変化させる家計が大部分であることを発見した。さらに、日米において選択される消費経路に有意な違いが存在することを確認した。これらの結果は、減税などのマクロ経済政策の効果が日米によって異なることを示唆している。

Keywords: ライフサイクル・恒常所得仮説、仮想的質問、合理的習慣形成理論、プロスペクト理論、現状維持バイアス、消費飽和(satiation)、借入制約、日米比較

JEL Classification Numbers: D91, E21.

* 本稿の作成にあたって、大竹文雄先生より懇切丁寧にご指導を頂いた。また、伊藤高弘先生、奥平寛子先生、近藤絢子先生、佐々木勝先生、チャールズ・ユウジ・ホリオカ先生、福重元嗣先生、山根承子氏から有益な助言を頂いた。なお、日本学術振興会より特別研究員として資金助成を受けた。ここに記して感謝を申し上げたい。文中における誤りはすべて筆者に帰すものである。

† 大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程 〒567-0047 大阪府茨木市美穂ヶ丘 6-1
日本学術振興会特別研究員(DC2) e-mail: kubota@iser.osaka-u.ac.jp